

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」
第2回 次 第

令和2年8月5日（水）

15時～17時（予定）

三鷹ネットワーク大学

- 1 三鷹教育・子育て研究所所長 三鷹市教育委員会教育長挨拶
- 2 個に応じた一人ひとりを大切とする教育について
 - (1) 「武蔵野東学園の取り組み「インクルーシブ教育」と「個別」を考える」
学校法人武蔵野東学園 武蔵野東小学校校長 小中統括校長 石橋 恵二氏
 - (2) 「GIGA スクール構想を生かした三鷹のこれからの教育」
三鷹市教育委員会指導課 中村 泰夫指導主事
- 3 意見交換
- 4 事務連絡

【石橋 恵二氏プロフィール】

学校法人武蔵野東学園 武蔵野東小学校校長 小中統括校長

東京私立中学高等学校協会常任理事、日本私立中学高等学校連合会評議員

東京都障害者差別解消支援地域評議会委員、東京都私学財団評議員

文部科学省中央教育審議会「新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会」委員

【配布資料】

- 1 「三鷹のこれからの教育を考える研究会」研究員一覧（新） （資料1）
- 2 「武蔵野東学園の取り組み「インクルーシブ教育」と「個別」を考える」 （資料2）
- 3 「GIGA スクール構想を生かした三鷹のこれからの教育」 （資料3）
- 4 令和2年度開催予定（修正版） （資料4）
- 5 参考資料：第46回教育再生実行会議（令和2年7月20日開催）（参考資料）

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」
(第2回会議録要旨)

日 時 令和 2 年 8 月 5 日 (水) 午後 3 時～5 時
会 場 三鷹ネットワーク大学
出席者 貝ノ瀬 滋 (所長)、後藤 彰 (座長)、阿原 あけみ、緒方 一郎、相馬 誠一、
常盤 豊、宮城 洋之、宮崎 望
オンライン出席-木幡 敬史、林 寛平、佐藤 量子
事務局 三鷹市教育委員会事務局、三鷹ネットワーク大学

〈議事要旨〉

(注) この会議録は抄録であり、すべての発言が記載されているものではありません。

1 事務局から報告等

事務局から探究学舎宝槻泰伸代表に新たに研究員にご就任頂いた旨を報告。

○探求学舎水谷禎憲監督 (宝槻研究員代理) 挨拶

探究学舎はこの地で新しいスタイルの塾として、オンライン授業でも脚光を浴びている。今日は水谷がオブザーバーとして参加させていただいた。今後とも、よろしく願います。

○宮崎研究員 (第 1 回欠席) 挨拶

現在のコロナの状況についてはソーシャルディスタンスという、いかにも人と人の心の中に距離感というか壁が生まれるような非常に響きが悪い言葉を毎日聞かされている日常の中で、コミュニティ・スクールとしても大きな試練を迎えていると思う。想定を超える現在のパンデミックの中で、後々「コロナ世代」と呼ばれるかもしれない子どもたちが、大変な不自由・不利益を強いられている。しかし、考え方によってはソサエティ 5.0=超スマート社会の人間に求められる「想定外と向き合い調整する」力を発揮しなければいけない社会環境を、今身をもって体験していることになると思うので、これを教育に生かさない手はないと思っている。子どもたちが持続可能な社会づくりの担い手になっていくためには SDGs 達成に向けた ESD とか、今回のようなかけがいのない経験が大変重要なものになっている。

私は、第一回に参加することができなかったので、記録を拝見し感想を述べる。前回の末富先生のお話の中でウェルビーイングという言葉が出てきた。日本の児童福祉の世界においては、伝統的な「児童福祉」、つまり受動的な弱者救済の福祉としてのウェルフェアから、新たな「子ども家庭福祉」の理念として、能動的、主体的な自己実現を保障するための福祉であるウェルビーイングへとシフトしてきている。子どもの幸福度を測る指標として、自己肯定感や子どもの貧困等について考えるときに、家族や友人、地域から大切にされている感覚が重要な要素になるというご意見であった。三鷹市の子ども子育て支援は多様な社会の参画と協働で行われている。三鷹市で実施している多機関の連携によって妊娠出産期から就

学後まで切れ目なく子育てを支援する子育て世代包括支援センター機能と地域ぐるみで子どもを育てるコミュニティ・スクールの仕組みが子どもたちのウェルビーイングに大きな効果があると思っている。また、末富先生のお話では教職員が5～6年で異動してしまう現実の中で一貫して子どもを見守り続けられるのは、ICT技術だけでなく、しかも要保護児童対策地域協議会などの地域の子ども家庭支援のネットワークの情報も含めたデータベース化が必要になるとのことであった。三鷹市においても、今後はICTを活用して関係機関でデータを共有し、切れ目のない指導・支援に活かしていくシステム構築が課題となっていると認識している。

2 三鷹教育・子育て研究所所長 三鷹市教育委員会教育長挨拶

・・・・・・・・・・・・・・・・・・貝ノ瀬教育長

第二回目となる研究会は、武蔵野東学園の統括校長の石橋先生にお越しいただいた。三鷹の公教育の中で活かせるものは活かしたいと思っていたので、今日お話をいただき、勉強したいと思っている。また、「教育再生実行会議」が1年ぶりにスタートした。その時の配布資料をご参考までに配布した。三鷹がこれからウイズコロナ、ポストコロナの公教育の在り方について、勉強を深めて、実際にそういう学校を作っていこうと考えたときに、ちょうど政府の方の教育再生実行会議の問題意識もほとんど同じ方向を向いていた。その中でお感じになったことなどを、この議論の中に反映していただければありがたい。後半は、本市の中村指導主事がこの個別最適化についての実際の動向の話をさせていただく。

また、新しい研究員として宝槻様に入らせていただくことになり、今日は、水谷様が代理でご出席いただいた。情熱大陸のテレビなどでも取り上げられ、今はブレイクして全国的に有名なので入塾希望が多く断るのも大変ということも聞いている。ただ塾といってもいわゆる偏差値を上げるとか、どこかの有名大学に入れることを目的にしているのではなく、意欲とか好奇心とそういう非認知能力を強めていくことで、結果として自己実現を図っていくということを支援している塾である。そういうムーブメントは公立の学校の中にも足りない部分が相当あり、武蔵野東学園の混合教育ということについても非常に誤解があるので、今日石橋先生のお話を伺って公教育の中でいかに取り入れて公教育を充実させていくかということ私どもも模索したい。

3 個に応じた一人ひとりを大切とする教育について

(1)「武蔵野東学園の取り組み「インクルーシブ教育」と「個別」を考える」

・・・・・・・・・・学校法人武蔵野東学園小学校校長・小中統括校長 石橋恵二氏

今、文科省の中央教育審議会ですべての時代の初等中等教育をどうこれから考えていくのか、そういう特別部会が昨年からは開かれており、私はその委員になっている。今日は、文科省の会議の中で話題になっていることもお話ししたいと思っている。

武蔵野東学園は私立学校で、幼稚園から高等専修学校の一貫した教育を実施している。また自閉症児が非常に多く在籍している学校であり、今日はインクルーシブ教育と個別とい

うところにスポットを当て、お話していきたい。

武蔵野東学園の概要だが、昭和 39 年に設立した幼稚園から始まり、そこから保護者の強い願いによって義務教育の小学校、中学校ができ、高等専修学校ができた。自閉症・発達障害の子どもたちは 470 名。この他に学園には教育センターという施設があり、近隣の学校から、また地方の学校から週に何回か、この教育センターで私どもの教育を受けている子どもたちが 600 人ほどいる。また高等専修学校を卒業した自閉症児が 1000 名ほどいて、卒業した後の彼らがどう生活していくのかも見つけ、グループホームも立ち上げて、今運営している。

特色は混合教育、いわゆるインクルーシブ教育である。一緒に学校生活を送る環境が混合教育であるが、全員が全員、普通学級で学ぶということではなく、学校生活の活動全体が共学体制ということである。自閉症児には「生活療法」という指導方法によって社会自立を目指している。

本年度の小学校の児童数は 290 名。健常児クラスは A、B 組で各 30 人から 35 人である。自閉症児クラスは C、D、E 組で各 10 名ずつ。特別支援学校だと児童 3~4 人につき、先生が 1 人だが、本校では 10 人を 1 クラスにして、主担任が 1 人。集団で教育をしているところが一般的な特別支援学校と違うところである。教員数は 555 名の児童数に対して 63 名おり、人数としてはかなり多いと感じられると思う。健常児クラスは専科制だったり、今話題になっている教科担任制を高学年から敷いている。また、C、D、E 組の授業は習熟度別に行う。

中学校は小金井市にあり、生徒数が 290 名で、うち自閉症児が 100 名。小学校も中学校も 3 分の 1 が自閉症の子どもたち。さらに自閉症児クラス C、D、E 組は各 12 人。教員数は 44 名。中学校は、入学と進学について、少し特徴があり、健常児クラスの方は、全員が高校受験をする。7 割程度が私立高校に進学していく。自閉症児においては全て自閉傾向がある、発達障害があるという診断を受けた生徒が入学してくる。ほぼ 9 割が系列の高等専修学校に進学し就労に向けていく。生徒も保護者も武蔵野東学園は混合教育を実践している学校だということをあらかじめ理解し、健常児クラスには自閉症児とともに学ぶ学校だということもわかって入学してきている。

続いて、混合教育について説明する。学校生活全般で何らかの関りがあるということであるが、授業を常に一緒に受けているのではなく、また一時的な交流でもない。その子に合った混合の在り方を一人一人考え、週に 2 時間とか 3 時間とか制限があるわけではなく、この子はもう少し健常児クラスで学べると思ったら授業参加するし、ある单元だけということであれば、その单元だけに出していくという考え方である。

混合教育を支える仕組みは、先ほど話したように、まず、入学してくる生徒、保護者の理解があるということ。そして入学後もいろいろな啓発をしていく。健常児クラスに対しての理解教育を必ずして、また、本校の中学校は道徳ではなく「生命科」なのだが、命の在り方とか、障害のこと福祉のこと、こうしたことを考える授業をして、混合教育をさらに深く学ばせていくようにしている。

柔軟な健常児クラスへの配属を心がけ、その時々で見直す。うまくいかなければ C、D、E 組で学び立て直して、A、B 組の方にまた再度配属していく。

教室配置は、A、B 組の間と、前に C、D、E 組の自閉症児クラスがある。教室の廊下側仕切りはすべてガラス張りで常に A、B 組、C、D、E 組が何をしているかが生徒同士、児童同士が分かる環境にしている。私たち教師も、どういう指導をしているか、どういう子が調子が悪くて、調子がいいかが分かる。特別支援学級が校舎のどこか違う棟や端っこにあるのではなくて、常に一緒にいるという状況を作り出しておくことが大事な点である。図の左側（西側）は特別教室で、家庭科室、美術室、上側（北側）は習熟度別授業をする小さな 20 人ぐらいの教室を 4 つほど設け、教室配置にも工夫をしている。

具体的な関わりとして、中学校は毎朝 A～E 組と一緒に清掃する。学年ですることもあるし、縦割りのときもある。授業は C、D、E 組から A、B 組に生徒が学びにくる。通常学級から特別支援学級の方に行くという通級の逆の形をとる。ここが、公立学校と違うところ。校外学習、宿泊学習も一緒に行き、部屋も一緒である。この子にはどういうサポートが必要なのかというのを生徒が分かっているので同じ部屋にしても大丈夫で、共に過ごしていくわけである。もちろん、てんかん発作などを持っている子どもたちは先生と一緒に寝る。スポーツ大会も学年ごとの混合競技種目が必ずある。学園祭や部活も一緒である。

個別計画については、ゴールを定め評価していく AGE システムというものがある。A は Assessment、G は Goals&Objectives、E は Evaluation。私たちは AGE システムの中に 10 項目、排せつや食事等いろいろな目標値を持っている。あらかじめこういった目標を事前に立てておくことが必要であるが、こういった目標はまず教師側が考え、学期末に保護者と話し合っ来て学期の生活面などを具体的に提案していく。イニシアティブは学校側が持つが、保護者とは比較的スムーズに進んでいる。それは日常からコミュニケーションを充分にとっていないと成立しない。いきなり学校側からこうすると言われても保護者は納得できないだろうから、注意をしていく必要がある。

プリント教材は、単元ごとに段階別に、何千種類ものプリント教材がすでに用意できている。この子にはどれが合うかを教師側が選んで、それを与えて授業中にさせていく方式。

それと、プランノートという独自のノートがある。これは簡単に言うと連絡帳のようなものだが、プランノートには保護者が AGE で立てた目標をさらに分割して目標設定し 1 週間どう取り組んでいくかを記入し、学校とキャッチボールを毎日している。1 週間、1 か月、3 か月が過ぎていくとどういう風に目標達成していったかが分かる仕組みを持っている。指導の一貫性に関しては、幼稚園から高等専修学校までの一貫した指導方針というものがあり、大切なことは上級校への「申し送り」だと思う。プランノートにしても、上級校への申し送りにしても、一年間の成長記録を見ればこの子はどう育ってきたか分かるようにしていくというシステムは求められているし、必要なことである。

次に、障がいを持つ本人の意識ということについて。特に境界線児と言われる比較的軽度の子どもたちの意識である。個に応じた教育をすると本人は、先生たちから特別扱いされているように思う。本人たちの意識をどのように転じ、克服させていくかは大事なこと。でき

ないことに対して手を差しのべるということは当たり前のことなのだよ、ということをまず教える。特別扱いというのは恥ずかしいことではなく、できるようになった方がいいだろうと。これは境界線にある子たちだけではなくて、学力不振の子どもや、何かが不得意だという子に関してもそうだと思うし、これからの教育に重要なことだと思う。アレルギーをもった子どもに対して、特別食を用意したり、配慮をするが、それは恥ずかしいことではなくて、命に関わるからそういうことをしている。特別支援教育というのは特別なことかもしれないが、必要だからそうしていると考えるとよい。

アメリカのテレビで見たことがあるが、ADHDの子を持つ親が、子どもがスペシャルエデュケーション、特別な指導を受けることになったら感謝していた。しかし、日本では特別を嫌がる。ここの国民性の違いというのはあると思う。

子どもが幼稚園、小学校ぐらいまではまだいいが、中学・高校以上になっていったとき、また社会に出たときに、周囲の理解が得られにくい言動が、大きく問題になってくるし、人に嫌がられたりしてくることになる。その問題となる根本はどこにあったのかというと小学校や中学校時代に積み上げてきたものが薄いこと。特に、生活力。さらに体力がない、集中力が続かないというようなことで、これらは小さな時に強化できることである。武蔵野東学園の教育の中で体育指導はとても重要な位置を占めている。協調性、社会性という点で、体育的指導は彼らには欠かせない指導である。

また、かなり多くの子どもたちがこれまでに色々なことを言われて傷ついている。マイナス体験がたくさんある子は、大人になったときにそれが爆発することが多く、それをできるだけさせないようにしていくことが大事である。義務教育期間中にきちんと指導していくことは、マナーやモラルに対する教えである。生活力というのは身辺自立、生活自立ということの他に、ルールを守るとか順番を考えられるということである。職場では返事や挨拶ができるとか、そういったことをしっかりと小さい時から指導を受けてきた子は、大人になってから可愛がられる存在になってくる。

本校の中学校の教育は、5点に集約できる。1つは生活に必要な確かな力で、着実な力が中学校になると求められてくる。そして思春期にさしかかってくるので、心の安定はかせない。続いてコミュニケーション力。どういう風に受け答えしていくのかを一つひとつ教えることである。また社会科や理科も教える内容が教養につながるようなものを考え、それが将来ためになり、自分の知識として生きてくるような学習としたい。

生活療法に関しては、24時間の生活を通しトレーニングによって落ち込み部分を克服していくという教育方法である。トレーニングをするしないは、特別支援教育の中での論じられることもあるが、私たちは子どもには内在する力があるのだから、トレーニングによって培っていけるものがあると信じてやってきた。成果として出てきているものと思う。

指導の3本柱は、体力づくり、心づくり、知的開発という3つ。ただこれは、勉強ができるようにすればいい、また偏差値を上げようという考え方ではない。生活に密着した力かということと、学んできた教養を生活に生かしていくということである。

私たちの教育は集団的教育である。集団で見えていかないと個というのは浮き出てこない。

個別と言って個々を狭い部分でその子の力を見ているのではないか、全体を見渡すことで見えてくるものがたくさんあるのではないかと思う。本学園では小集団から大集団に徐々にもっていければよいという考え方をもっている。

時間割については、国語、数学、英語は習熟度別で、体育、美術、音楽などはクラスごとで、以下独自教科は資料の通りで、「生活教養」というものがある。

「技能」の授業は個々の得意を探る。技能の教科は、絵画、陶芸、切り絵、クラフト。手芸、器楽、コンピューターの7つの分野である。教員が保護者と話し合って選択していくケースもあるし、本人の希望ということもある。好きなことを集中して行うことを教育の中に位置づけることも大事な視点である。技能でPCをやったからコンピューターの会社に行くとかではないが、ギターをやって自信をつける子もいて、集中して何かを続けていけるような子どもになることは大事なことである。

指導上の大切な4つの視点について。これは生徒たちが将来社会に出て働く視点、学力よりもまず生活力ではないかということと、学歴よりも、社会性ということ位置づけておきたい。保護者が求めてくるのは学歴や、偏差値のような数字であるが、自分でできることをもっと増やしておいてあげてほしい。何でできないのかと言わないで教えてあげることが必要なことである。マイナス体験をあまり積ませないような指導も必要だと思う。

進路に関しては、彼らが別の私立学校に進んだり、一般受験をしようとするケースもある。それを一切否定するわけではないが、問題点を少しだけ整理すると、一つは進学する学校が善悪をはっきり指導してくれる先生や学校かということ。また本人が納得するような指導をしてもらわないと、子どもたちは混乱し、ついていけなくなる。少人数だから大丈夫そうとか、面倒見がよさそうな学校だと思って入ってみて現実はどうか。特に高校については思っている以上にトラブルはある。ポイントは、何かあった時の学校の対応と、周りの生徒や学校の先生たちが本人をしっかり理解してくれるのかという点だと思う。中学校以降の進路で、定時制、サポート校やフリースクールに進んでいく子も多い。しかし、高校ではなくて本学園にある高等専修学校のようなところに進学してもいいのだが、結果的にフリースクールの方に進学を求めていく。これは中学校の進路指導において、やはり狭い選択肢になっていると感じてしまう。

特別支援教育の現状の課題。これは、文科省の中で話し合われていることと同じようなところがあるが、1番目に関しては私が考えているところで、中教審の人たちが言っていることではない。それは個別指導への傾倒という点。もっと集団を見ていかないといけないのではないかということと、社会性・協調性という指導の観点はあるかということ。2番目以降は国でも問題としているが、通級の在り方、交流の在り方、教師の専門性は担保できているのか、免許制度についてもこれでいいのだろうか、そして特別支援教育の先生ともっと人事交流があってもいいのではないかという検討がされている。それから指導の共有化が図られていないという点。学校全体でプリント教材がきちんと共有されているかどうか。もっと大きく言うと、三鷹市とか武蔵野市の中にそういうステーションがあって、教材の共有化が図れていけば、先生たちはもっと楽だと思うし、いい指導ができると思う。特に特別支援

教育については、たくさんの個に応じたプリントがあれば助かるし、その子は救われると思う。先生たち同士の指導の共有化が図られていないので夜遅くまでの勤務になってしまうのではないかと思う。

社会適応という観点から、社会に出るということを意識した指導がもっと必要だと思う。学校を休まない、挨拶・返事、マナーやエチケット、作業力ということをもっと積んでほしいというところがある。また各教育現場で子どもや保護者に「発達障害」ということにもっと触れてほしい。身体障がいの人たちの理解ということで、車いす体験や目を隠して歩いてみたという体験だけではなく、発達障害の子どもたちはもっともたくさんいるはずなので、この部分にもスポットを当ててほしい。

障害者理解教育の観点としては、友だちのいいところを小学生の頃から話し合ったり、個性のことを話し合ったりして、違うところばかりに目を向けるのではなく、同じところもたくさんあるよといった話をしてもいいのではないか。また、障がいと病気は違うということも高学年ぐらいになったら教える。自分に置き換えていくのが今の子どもたちはとても苦手なので「自分だったらどうする」「どう思う」を考えさせる指導が必要である。自分に障がいがあったら、自分にこういうことを言われたら、ということを考えさせるのも理解教育ではないかなと思う。クラスに蔓延する言葉や態度、「消えろ」とか「うざい」とか、違いがあることに対して鋭い言葉を投げかけるようなことは許さないことをもっと学校が、教師がもっていないといけないし、理解教育が進んでいかないのではないかと思ってしまう。クラスの保護者の理解と障がいの子がいたとしてもちゃんと向き合った姿勢を学校が見せ、このような方法で学校はやっていきたいということをはっきり言えば、当該保護者も安心し、まわりの人も理解をしてくれると思う。

話の最後になるが、子育てのゴールは子どもが自立し、働いて社会のためになったというところだと思う。人並みではなくて、この子だからできること、この子に合ったものということを考えてみたい。それは障がいがある子どもだからということだけではなくて、他の健全な子どもたちも同じことが最終的には言えると思う。

社会の変化というものは、確かにあった。マイノリティーの人たちの理解は確実に進んできているし、「障害者差別解消法」もできた。雇用内容にみても個々に合わせて仕事を考えてくれる時代にもなってきたが、一般の人たちは障がい者をどう見ているだろうか。残念ながら、未だに誤解や偏見があるように思う。

共生社会、インクルーシブな社会に必要なこと、それは一緒にいる経験の大切さ、それと色々な人がいるということ、その人なりの関わり方が考えられるということ、そして違うことを冷かしたり、馬鹿にしたりしないということが大事なことだと思う。さらに、日本人特有の「みんなと同じ」という観念。やはりこれからは、それぞれの能力で、それぞれの働き方生き方をするという時代が来ていると思うし、できないこと、従わないことを人のものさしにしないということが大切だと思う。

相模原の悲惨な事件があったが、自分の思うように障がいの人が動かないとか、従わない人だという考え方が起因しているものだと思う。とても恐ろしいこと。グローバル社会と言

われているが、その前提にあるのは、多様性を認める心だと、ここを押えておきたい。

最後に、彼らにとって、また人にとって何が幸せなのかということ。全部支援を受けて生きていくことは幸せではなく、自分の思いや考えで行動が少しでもできるということが幸せなことだと私は思う。社会との関わりがいつもあるということ、疎外されていないということ、さらに笑顔があるということが大切なポイントである。発表は以上です。ありがとうございました。

<意見交換>

○後藤座長 それでは、それぞれ皆様のお立場から、個に応じた一人一人を大切にする教育について、ご質問、ご意見等をいただきたい。

○常盤委員 石橋先生に、お伺いしたい。小学校の概要で、健常児クラスと自閉症児クラスと2つあるという事であったが、保護者は偏差値とか学力にこだわりを持たれるケースが多いと思うが、その中で、武蔵野東学園の小学校を選ばれて、健常児クラスを選ばれる保護者の方の考え、思い等、特徴があつたら教えていただきたい。

○石橋先生 健常児クラスの保護者の印象は、教育に熱心な方が多いと思う。人を大事にしてくれるかどうかという観点から学校選びをしていると思う。有名校を目指すということではなくて、我が子をどう教育してくれるのか、またグローバルとかいろいろ言われている昨今だが、この学校に入るとどんな子になるのかということが最初にあると思う。

あと、この学校の特色が自分の子どもには良いと感じているところだと思う。特に中学校の生命科と探究科の授業を評価してくださっている。もちろん、高校への進学も大事ですが、人をどう育ててくれているかというところにあると思います。

○緒方研究員 2点お伺いする。概要に教育センターというのがあるが、この教育センターの授業、取り組みの内容を補足していただきたい。文化祭等で行くと、学びや調べだけではなくその発表の仕方、プレゼンテーション、表現能力が素晴らしいと思った。指導方法を教えていただきたい。

○石橋先生 教育センターに関しては、いろいろな講座があり、主に、放課後にやっているが、コンピューター、体育、ダンス、一般的な学習、療育、言語指導、コミュニケーション指導などを行っている。音楽などもあって、自分の子どものどこが弱くて、どこを伸ばしたいかで選択している。夏休みや冬休みなど長期間の休みでは、5日間、6日間のサマープログラム、ウインタープログラムがあって、これは全国から東京武蔵野へ出てきてホテルなどに泊まって集中的に受講して帰られている。成果が出たのか出ないのかシビアなものもあるが、講座は幼小中高生まで受け入れている。

プレゼン能力の件は、ICTをかなり使うようになってきて、小学校段階でワードやエクセルの打ち込みを教えるが、自分たちでどんどん覚えている。また、生命科や探究科の授業で、意見を述べる機会が多く、人の意見に対して腹を立てるのではなく、まず、意見を受け止めて、自分で処理ができるかということや、それは違うのではないかと、批判的に言われる経験も学びになっている。発表する機会が本校は多いということもある。

○宮城研究員 私は中学校の校長であるので、中学校として参考になる事がたくさんあった。卒業後、ギャップがあるという話もあったが、卒業した後の子どもたち、グループホームがどのような事をされているか。本旨からずれるが、働き方改革についてという点で、プリントの蓄積、資料の共有化ということで、プランノートという話があったが、具体的に伺いたい。

○石橋先生 グループホームの件だが、ほぼ全員が武蔵野東学園の卒業生、高等専修学校を卒業した子たちで、順番待ちになっている。順に面談をし、入所者希望があれば聞いていくが、まだまだホームは足りない。生活力を高める指導をずっとしてきたので、着替えのサポート等は必要ない。就労している子たちなので、会社や作業所でうまくいっているかいつてないかを聞き出して橋渡しをしている。食事は提供していて、朝晩一緒に食べたり、途中でレクリエーションをしている。卒業生のサポートという点ではかなりしている方だと思う。

働き方改革の件だが、教材に関しては、一つのフォルダを持っていて、小学校だと小学校のプリント教材のフォルダがあり、そこにアクセスすれば、パッと出てくる感じである。もう一つは四谷学院という予備校と提携して、プリント教材をまとめたことがある。本学園の教員たちは、プリント教材を自由に使える契約をしている。専門家がまとめたプリント教材なので、挿絵が入っているとか、段階、順番がしっかりしていて、それが使えることになっているところは大きい。

プランノートに関しては、我々は必ず目をとおして、1年間の成長記録を高等専修学校の先生であれば、中学校、小学校、幼稚園の記録を全てコンピューター上で見ることができる。申し送り事項の他に、どう成長してきたか、どのような問題を経てここに至っているか、歴史を知ることを心がけている。

○宮城研究員 プランノートは、家庭と学校とも電子化された状態であるか。

○石橋先生 今、それが話題になっていて、幼稚園は電子化に踏み切った。来年位からは小学校も電子化する。保護者も働いている人が多いので、ちょっとした時間にさっと打ち込めるようなものにできないかと言われている。手書きではなく入力をしてもらえるようになる。

○後藤座長 ありがとうございます。

○阿原研究員 中学生の子どもを持つ親として、身近に感じるお話であった。子どもたちが小学校に通っていた時、同じクラスにはいわゆるグレーゾーンと言われる子どももいた。運動会や自然教室など、協力し合いながら生活をする行事の際に、子どもながらに随分苦労していたのだと後から知った。子どもたちは一緒にいることが当たり前だと思って、学習・生活をしていても、時として我慢をしたりストレスを感じることもあると思う。

子どもがそういったことを学校に伝えた場合、その子どもたちにどのようなケアをしているのか石橋先生に伺いたい。

○石橋先生 難しい問題ではあると思う。本校を卒業した子どもたちがよく言うのは、一緒にいることや、いろいろなことをしてしまうのも当たり前だと言っていた。初めは障がいのある子と見ていたが、次第に仲間なのだという思いになり、受け止めてくれていた。噛まれ

たり、ひっかかれたたりすることもあるが、その時は先生が中に入らないとならない。まずはやった本人が謝らなければ解決しないので、そこはきちんとする。前もって言葉をかけるとか、模範となる行動を取ってあげると、自閉症の子は間違っただけの行動をしないということも多い。本校の健常児たちが大きなストレスになっているかというところではないと思う。いつも一緒にいるという関係から分かることであり、その対応も分かるというものである。

(2) 「GIGA スクール構想を生かした三鷹のこれからの教育」

・・・・・・・・三鷹市教育委員会指導課 中村指導主事

私からは、GIGA スクール構想を活かした三鷹市のこれからの教育について説明をする。まず、現在の世の中動きについて簡単に説明する。PISA2018 年の中の ICT の活用状況について、日本と海外の大きな差が見られた結果があった。海外における授業と家庭、日本における授業と家庭の ICT の活用状況だが、海外は、授業で十分に活用している。一方、日本では低い状態であること。家庭では、海外は課題解決や調べ学習に活用しているが、日本の子どもたちは、ゲームに活用しているという結果が出た。このことから、子どもたちが ICT を学びに活用していないという現状がわかったので、文部科学省としては、GIGA スクール構想を出して、一人一台の端末を実現に向け進めることになった。

実現すると、一斉学習では学びの進化が、個別学習、共同学習では学びの転換が見られると言われる。一斉学習では、一人ひとりの反応を見ることができ、双方向の学習ができる。個別学習では、学習内容を把握することができ、学習履歴をとることができる。共同学習では、リアルタイムで子どもたちの考えていることがわかる、意見交換ができるなど、学びの方向が変わってくるということが考えられる。

三鷹市として、ひとり 1 台の端末を持つということで、何ができるようになるか。どのように教育をこれから進めていくかを考える。

学校でできること、家庭でできることが考えられるようになる。学校では、教師がいわゆる講義型の授業をしているのであれば、様々な学習支援の動画やアプリがあるので、これで十分授業が成り立ってしまう。それでは深い学びができない。教師が AI にできないことをしていかななくてはならない。授業のファシリテーターとして学びを深めることができないと、AI がとって変わってしまうだろう。

家庭でもタブレットを活用できるようになると、家庭教育の差ができてくる。家でタブレットを開く環境があるか。教育委員会でもシステムを構築して、家庭でも子どもたちができる、保護者もチェックできるようにしたい。また、動画でも学習ができるような環境を整えていきたい。反復学習ができるような動画を提供していきたい。

そうすることにより、学校、家庭の学びが垣根を超えて繋がっていくことを考えている。

また、市で学力検査をしているが、経年変化を見て対応を考えていきたい。非認知能力を調べることができるので、これが子どもたちにどのような影響があるのか、家庭環境や教員の声かけで変わっていくのか、非認知能力がどのように育まれていくのかを調べていく。

校務支援システムも改良を加えていきたいと考えている。児童、保護者も一部入れるよう

にして、学びの見える化を考えている。例えば、教員用だと、個学習カルテ、生活環境なども含めて個別カルテを作って支援をしていく事を考えている。落ち込んでいる子がいると、学習カルテを見ることで、その子の家庭環境や何があったのか、何が課題なのかを記録することで把握し、的確なアドバイスができるようになる。

学習ポータルについては、動画教材を提供する事で、自分の苦手な部分がすぐ見えて、克服できるようにしたい。どのくらいの量か、苦手な部分がすぐ検索できるかは考えて進めていく。

児童、保護者においても、学習状況がわかるような見える化を図っていきたい。家庭と連携しやすい環境を作る。学校との連絡を、学年便りなどもタブレットで伝えて、保護者が見たらチェックするような、家庭との連携も図れるように考えたい。

M-METであるが、三鷹市の学習動画を配信している。武蔵野市と連絡して、動画を作成した。新型コロナウイルス感染症の影響で休校となり、生活が乱れたということがあったので、夏休み期間、朝8時から上映して、生活が乱れないようにした。(動画を流す)

動画では、朝、体操から始まり、1時限、2時限と授業をしている。的を絞って、指導教諭の先生に動画を作っていたいただいた。子どもたちのチャンネルを広げることで学ぶ意欲が出てきて良い。

三鷹GIGAスクール構想として、大きく2つを立ち上げた。ひとつは、GIGAスクールマイスターである。GIGAスクールマイスターは、ハード面の作成をして、各学校へ広めていく。もう1つは、研究開発委員である。研究開発委員は、ソフト面の開発をする。例えば、ハード面では、1年生からスタートするので、戸惑わないように、ルールづくりなどの作成をしてもらおう。今年度中に整理してまとめる準備をしている。ICT教育推進委員の役割も進めてもらおう。研究開発委員は、ソフト面、授業開発を進めてもらおう。効果的に活用できるか、動画教材の作成をしていただく予定。最終的には三鷹市のすべての先生に作成してもらおう予定で、三鷹市の先生だからできる授業、15分程度のもので、先生に負担なく子どもたちの学びを深めるようなものを考えている。その準備として研究開発委員の先生に進めてもらおう。

また、東台小学校に研究開発校として進めてもらっている。コロナウイルス感染症の休校期間中に、6年生の過程で環境があったので、Zoomを使って、朝のHRを行った。担任の先生が双方向で行った。学校に足が進まない児童や、学校で意見が言えない子供たちがチャットで意見をいえていたのが良かった。東台小学校としては、オンライン、オフラインでのハイブリッド型授業を考えている。双方向授業や、子供たちが学びのプランを立てて、学校と家庭でまなびをつなげていき宿題をなくすことできないかという研究を行っている。

大きく2本、GIGAスクールマイスターと研究開発委員を設置し、東台小学校で進めているが、立ち上げたばかりなので、皆様のご意見をいただきながら改善していきたい。

<意見交換>

○後藤座長 三鷹GIGAスクール構想、様々な活用の仕方があると思う。意見や質問、こ

んな事をやってみてはどうかということがあれば多岐に渡る視点から意見を伺いたい。

○緒方研究員 3点お伺いする。1点目は、コロナの連続災害、また複合災害があって、再び休校となった場合の対応をどう考えているか。

それから、三鷹ではこれまでもICTのモデル事業をしていた。教室内で、コンピュータ一室にいかなくても一人1台タブレットがあるので、通常授業でも調べ学習など活用できる。また、校外学習についてどのようなトライアルを考えていらっしゃるか。小・中一貫校ならではの取り組みをお願いしたい。

最後に、家庭環境ですが、ご家庭でWi-Fi環境ができない場合、どのような調査と手当てをされているのか伺いたい。

○中村指導主事 1点目は、第2波、第3波は考えていて、J-COMとの連携とのところで、何かできないかと始めている。動画を使ってオンラインでということ始めて、各家庭でタブレットを活用して授業をすることを考えている。

2点目の調べ学習、校外外でということでは、タブレットについては、LTE回線を使い、携帯の通信を使用するので、校外学習、Wi-Fi環境がない家庭でも使用できる。

3つ目は、J-COMが武蔵野三鷹局ということで、武蔵野市教育委員会と一緒に作成した。良いものが作成できたと思う。

○後藤座長：林研究員、お願いします。

○林研究員：せっかく日本全国でGIGAスクールを展開するので、例えば授業動画を撮影するときに三鷹市内の学校のみで使うといった形で閉じずに、それぞれの自治体や先生方の得意なことを活かして、優れた実践事例は全国に発信・共有するつもりで進めていただきたい。また、ICT教材の活用については、外部サービス（民間）を契約する機会が多くなると思うが、契約の際に、利用者アンケート等を三鷹市が独自に公表できるように契約していただきたい。こうすることで、優れたサービスを全国で共有できるようになり、また適切でない教材を見分けられるようになると思う。

不登校など学習の意欲が持ちにくい子どもにとっては、パソコンを起動し、オンラインシステムにつなぐまでに大きなハードルがある。こういった子どもたちにこそ届けたい教育機会でもあるから、取りこぼしの無いように仕掛け等を工夫していただきたい。

○木幡研究員：障害者とともに学ぶことは、これからの社会に必要なようになってくる。私は嘉悦大学の障害者学修生活支援委員会の委員長を拝命しているが、これまで聴覚障害を持つ学生を受け入れてきた。施設や人的支援の問題で入学を遠慮いただくケースもあると聞いているが、ICTを活用することでかなりの部分で支援できるようになってきた。聴覚障害への情報保障は、健常児と変わらないくらいできている。自分たちのコミュニケーションを改めて振り返ることができる。

しゃべる時に、早口とかよくわからず文字お越しができない場合、先生方が丁寧な言葉をゆっくりわかりやすく話してくださることは、それは学生にとって、健常者にもよいメリットがある。授業を改善してみんながわかる授業になる。

大学も負担ではなく、障害者を受け入れることはむしろインクルーシブな教育であって、

多様性を理解していくことは社会でも必要なことである。

実は、就職面でも、自分たちがやりたいというところに行けるような現況になっている。教材や教室もユニバーサルな視点で、UD フォントなど、わかりやすく見えやすいものは社会全体で必要になってくるだろう。

多様性を受け入れること、違いを受け入れるのは大事な視点である。聴覚障害の学生は、学ぶ意欲があって、周りの学生を巻き込んで、手話のサークルなど立ち上げている。新しい視点をもたらせてくれて、お互いに理解するということが良いメリットがある。

もう 1 点、学校を休まないということ。大学でも休まないということも大切な視点である。ちゃんと学校に行くということが今の時代に学校に求めるところである。

○後藤座長 最後に、宝槻研究員の代理の水谷様から意見を頂戴したい。

○水谷氏（宝槻研究員代理）：私は、探究学舎にいるが、都立高校の教員で管理職もしていた。武蔵野東学園の取り組みを伺って、教員の確保、育成に大変な努力が必要な学校ではないかと思うが、長続きさせていくには、先生たちが力を発揮していかないとできない教育と思う。小学生というところで、免許法も制限があったりするので、教員の確保と育成について教えていただきたい。

もう 1 点は、三鷹市のこれからの教育というところで、しばらくは大変だと、コロナの中で新しいことが生まれてきて、という状況の中で、新しいことを実施する。新しくやることが増えてきて、何かをやるとしたら、やらないこともしないと、現場の疲労感や重圧の中で、やらされるということが現場にあると、せっかくの取り組みがなかなか育っていかないのではないかということが気になる。

ただ、オンラインは、未来の一角を担うはずであり、可能性がある。新型コロナウイルス感染症の影響がなくても、そのような時代がやってきたと思う。

探究学舎も、オンラインを使つての授業で子どもたちの夢や期待を育てている。教育の未来のあり方だと思うので、私たちも、民間企業で限界はあるかもしれないが、お役に立ちたいし、アイデアの提供等もし、一緒に研究していけたらと思う。

○石橋先生 教員の確保に関しては、とても苦労している。混合教育をしている学校だということで、志願してくれる人も最近は多くなった。若手は研修なども必要であるが、現場が抱え込んで教えていくしかない。校長のリーダーシップというよりも、本校は学年主任のリーダーシップが大切だと思っている。そこがしっかりしていないと組織が揺らぐと思う。

以前は、勤務が 7-11 時という時代もあったが、最近いろいろなシステムを変えて行き、最近では、残業は月 20 時間以下になってきている。

○中村指導主事 ご指摘の通り、スクラップ&ビルド出なく、ビルド、ビルド、ビルドになっている現場はその通りである。先生方が新しいものを取り入れることで、何か楽になる部分もあると期待されるよう、動画の撮り方も簡単にできるように設計しているところである。

4 事務局から連絡

○鈴木施策担当課長 次回以降の開催日程について、第3回は10月13日(火)の15時から17時、三鷹産業プラザで行う。スクールコミュニティの創造をテーマに宝槻研究員と木幡研究員からのお話とディスカッションを予定している。第4回は11月10日、11日で最終調整中。視察は年明け以降に延期する。

5 研究所長の挨拶

石橋先生のお話は、勉強になり、公立学校でも取り入れなくてはと思うことがたくさんあった。個別最適化は、私どもが目指していることと同じ方向である。仲間づくり、集団づくりと矛盾しないように、一人ひとりの能力、個性を引き出しながら、ただ教材を個別に与えていく、指導していくということだけではなく、その子が持っている能力、個性に合わせた自らの学習を、自分で立てて、課題を設定して、解決していけるという学習過程を自分でできるよう、そのような支援を最終的に目指している。参考にさせていただきながら、進化させていきたいと思っている。

また、中村指導主事の話であるが、今、社会の変わり目で、非常な事態でもあり、難しい局面で、負担という言葉で表現するような事態もあるかと思われる。現場では、工夫をしてもらいながら、今の難局に対応してもらい、みんなで共有して乗り越えていきたい。教育委員会も一緒に努力していきたいと思っている。

特に、武蔵野東学園で実践されている、好きなこと、興味のあることに集中させていくこと、これは探究学舎の話も同じである。次回のお話も勉強になると期待しているので、よろしく願います。